

## 過去のうつわと未来のハコ

3.11以降、日本の都市の抱える様々な問題が浮き彫りになった。

日本は天災の多い国であり、自然と共にある暮らしをしていた。

しかし、進歩し続ける技術は人々の自然に対する意識を薄れさせた。今日、行政で行われている復興政策は、高台への移転、より高い堤防など、人々と自然を分断するものである。

終わりの見えない自然との攻防を続けるのではなく、自然を受け入れ、うまく付き合いながら暮らししていくことは出来ないだろうか。

そこで私たちは、被災した土地に「守る、伝える」場をつくる。災害から人命を「守る」。震災があった事実を「伝える」。

この土地に再び天災が訪れたとき、それを受け入れることのできるまちにする。



### 01. 石巻市門脇町・南浜町・雲雀野町

石巻市は、宮城県の中でも今回の震災による死者数・行方不明者数が最も多い地域である。私たちは、今後の石巻市の復興の手掛かりを求め、現地視察へ向かった。そこで得られた知見から、私たちは高台（日和山）から石巻湾に至る地域に提案を行う。

この地域にある平地は住宅街が形成されており、津波によって甚大な被害を受けた場所である。



### 02. 被災状況

津波は、沿岸部のみならず石巻駅周辺市街地にまで及んだ。しかし、石巻市の中で唯一高台は全く浸水していなかった。そこで私たちは、高台と平地の関係性に着目した。

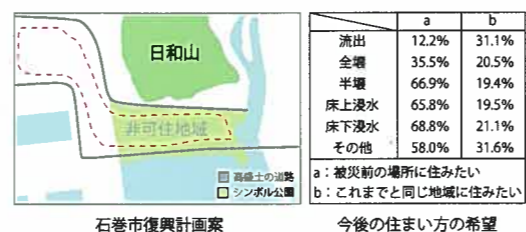


### 03. 石巻市の将来と子どもたち

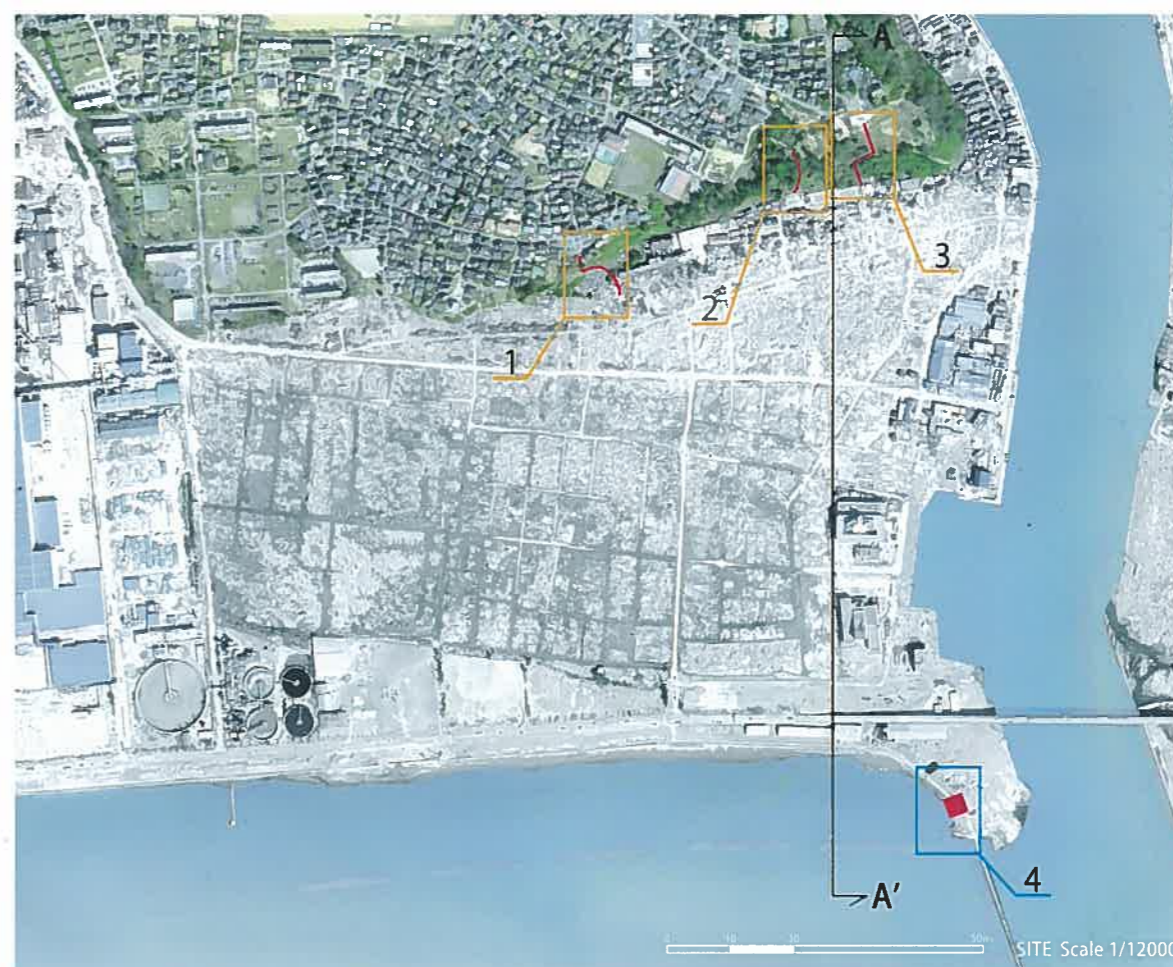
石巻市は、高台より南の地域を非可住地域とし、シンボル公園とする復興計画を立てている。一方で、地域住民の半数近く、また家が流出した住民であっても、約40%が被災前の場所での生活を望んでいる\*1。

私たちは被災した地域に再び人々を戻したい。住みたいと望む住民が一人でもいる限り、その権利を奪ってはならない。しかし、土地の権利関係やがれき処理の問題など復興には時間を要する。将来的に、今後の復興は子どもたちが担うと考える。「子ども参加に関する意識調査」では、この場所に住む約9割の子どもたちが復興に向けたまちづくりに関わりたいと考えている\*2。

そこで私たちは、子どもたちが主体的にまちづくりを行うためのきっかけをつくる。これは、今後の復興を子どもたちに託す提案である。



\*1 石巻市ホームページ \*2 国際NGO, SCJによるアンケート調査結果



### 04. 高台と平地との境界：守る、想つ場

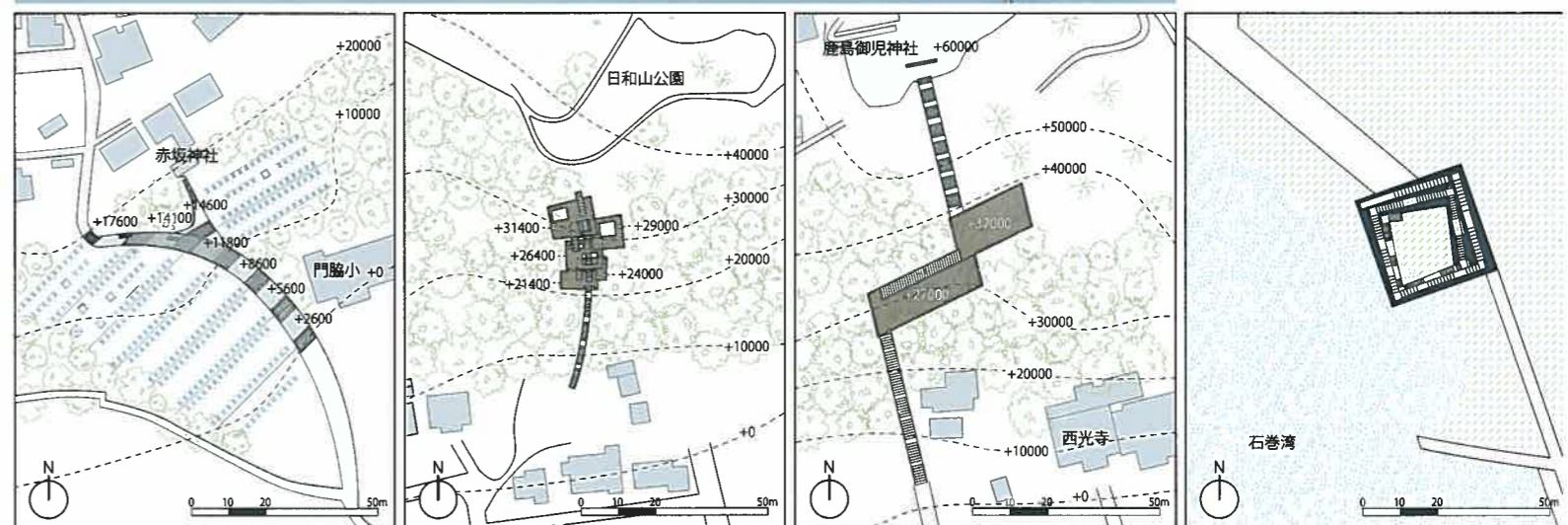
津波被害を受けなかった高台、全て流された平地。今回の震災により、高台の安全性が再認知された。しかし、故郷である平地に住む人々の中には、故郷を離れたくない住民もいる。

そこで、高台と平地との境界に「守る、想う」場を提案する。「守る」場では、避難路が日常的に使われることで、天災時には、容易に避難ができる。「想う」場では、様々な風景により、住まうことの原点を考える。

### 05. 平地と海との境界：伝える場

10年、20年と時を経て震災の記憶は風化していく。このまちは、今回の震災を忘れてはならない。

そこで、平地と海との境界に「伝える」場を提案する。「伝える」場は、震災の記憶を保存し、これから成長することもたちに伝えていく。岬に建つ灯台のように、まちと人々と共にこの土地にあり続ける。



#### 04-1. 墓地とハコ

門脇小学校の隣にある墓地に、鎮魂と安らぎの場として墓地とハコの間を提案する。子どもたちが持つ墓地の負のイメージを払拭し、風景に馴染む墓地は想う行為を誘発する。

#### 04-2. 公園とハコ

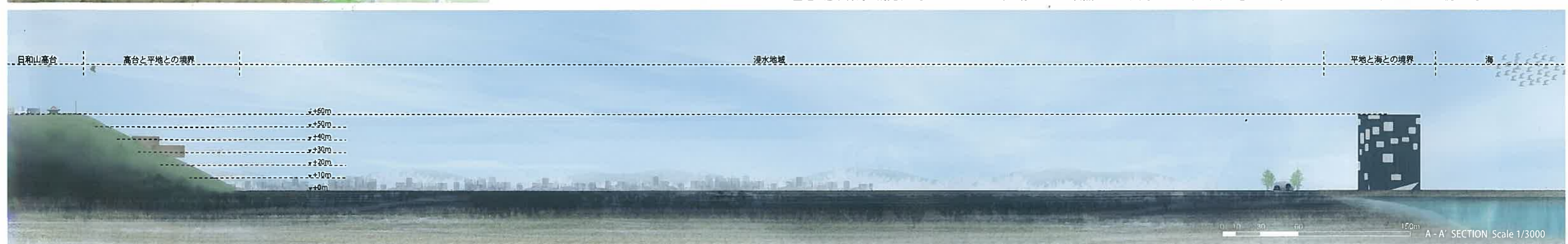
高台の日和山公園に続く避難路に、スラブのずれたハコを提案する。公園の楽しいイメージが周囲に拡がり、平地との境界に建つ。子どもたちは、森の中に佇むハコで自然とふれあう。

#### 04-3. 寺社とハコ

高台の鹿島御児神社と平地の西光寺をつなぐ避難路に、鳥居と呼応したハコを提案する。木々に覆われたハコから見える岬の風景は、子どもたちに過去と未来を想わせる。

#### 05-4. 岬とうつわ

石巻湾に最も近い場所に位置し、堤防に向かう動線上にうつわを提案する。復興とともに子どもたちは成長し、人々の記憶は薄れていくが、うつわは記憶をとどめ続ける。

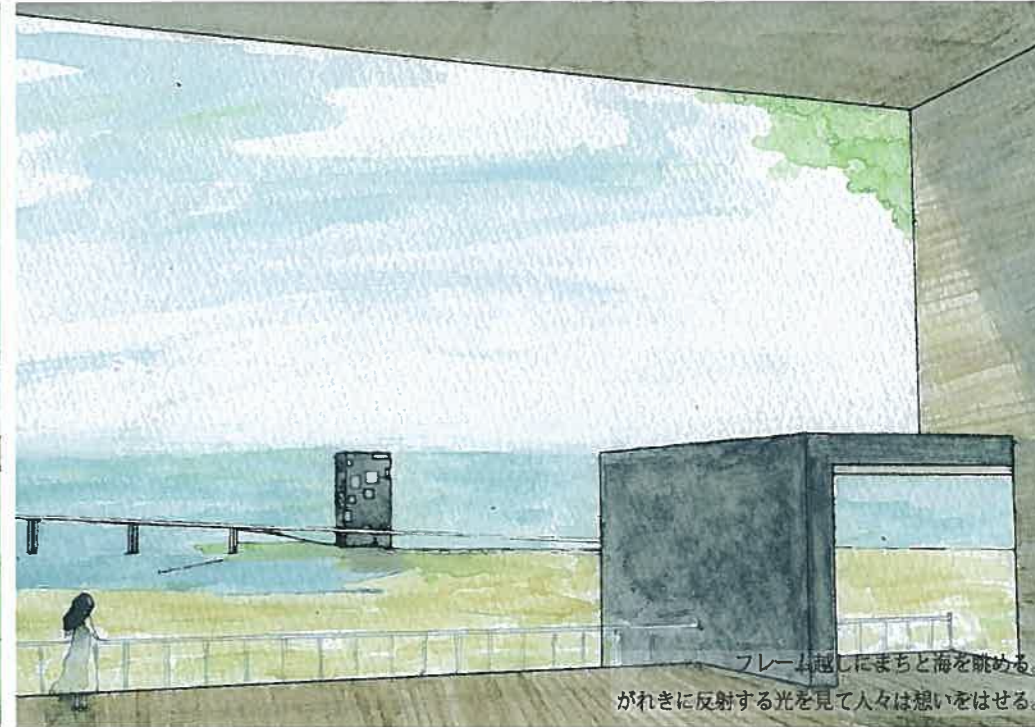




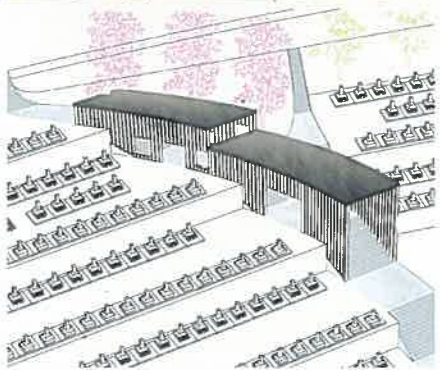
階段下のハコの入口から高台を見上げる。  
ハコが墓地に滞留の場を生み出す。



一番下のスラブから斜面地を見上げる。  
人々は多様な場を思い思いにめぐる。

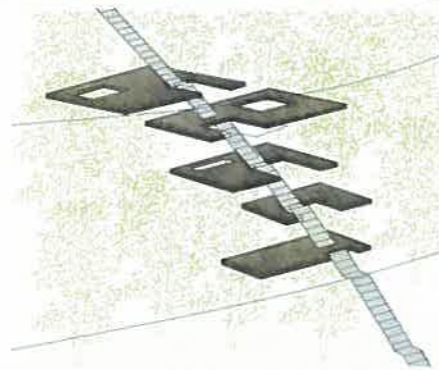


フレーム越しにまちと海を眺める。  
がれきに反射する光を見て人々は想いをはせる。



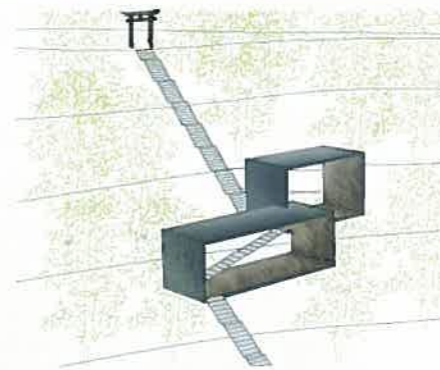
**墓地を通りぬけるハコ**

墓地を通過する既存の避難路にハコをかぶせる。ハコの中の空間は壁面がルーバーになっているため視線を遮らず墓地と一体化しており、ルーバーに設けられた開口は座って墓地を眺めたりなどのアクティビティを誘発する。そうして墓地は日常的に人が訪れる場となり、ハコとともにまちになじんでいく。また、避難路とは別の階段でハコの上に登ることができ、そこから墓地を通してまちと海を望む。子どもたちが先人と対話し、まちの歴史を受け継いでいく場となる。



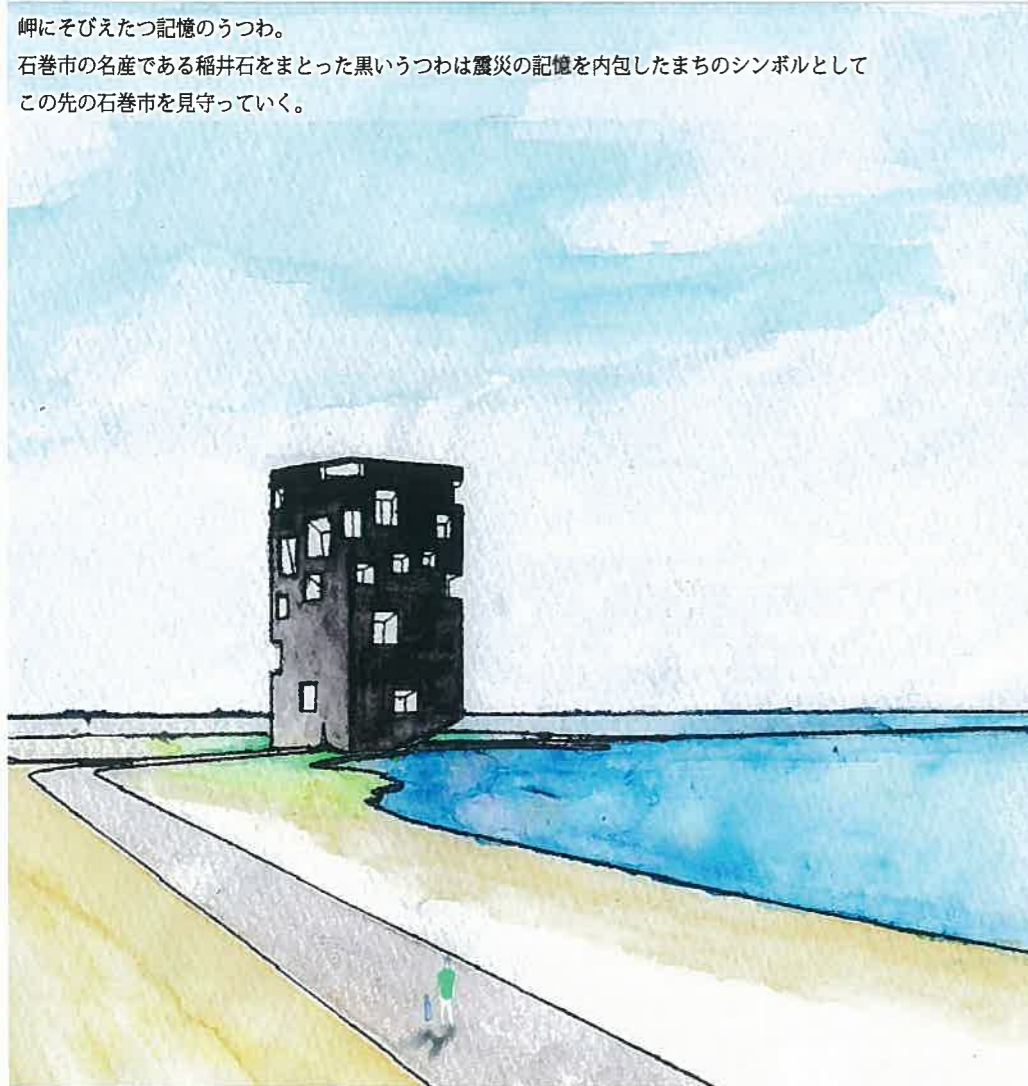
**斜面と重なり合うハコ**

様々なスラブと斜面の木々が重なり合い多様な空間が生まれる。スラブに所々開いた開口からは木々を見降ろすことが出来ると同時に下のスラブに光を落とす。木漏れ日溢れる中で人々は思い思いの場をみつけ、そこにたずむ。子どもたちは森の中を駆け巡るように、様々な場に遭遇しながら高台へ続く階段をかけたのぼってゆく。ふと振り返るとまちと海の風景が広がっている。斜面地と風景が溶け込んだ場となる。



**風景を切り取るハコ**

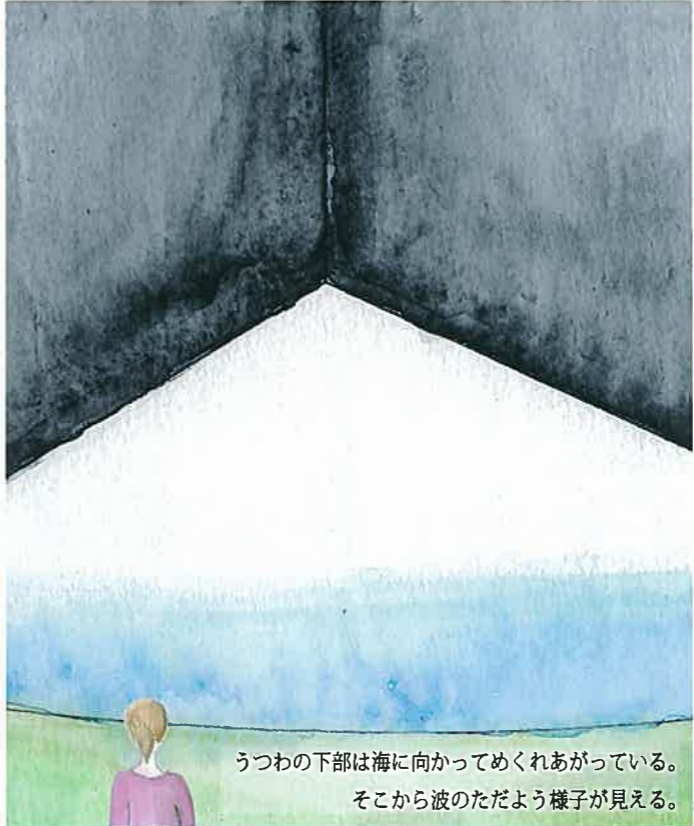
高台にある神社に向かう参道に、2つのハコが浮かぶ。それぞれ鳥居と呼応したフレームの形状をしており、異なる風景を切り取る。避難路にもなっている参道の動線上から外れるようにスラブに移り、開口から見える景色を眺める。ハコは神社と呼応するように静かで神聖な場となる。まちと海とその境界に建つつつわを見て、子どもたちは昔の風景に想いをはせながら、復興していくまちを見守ってゆく。



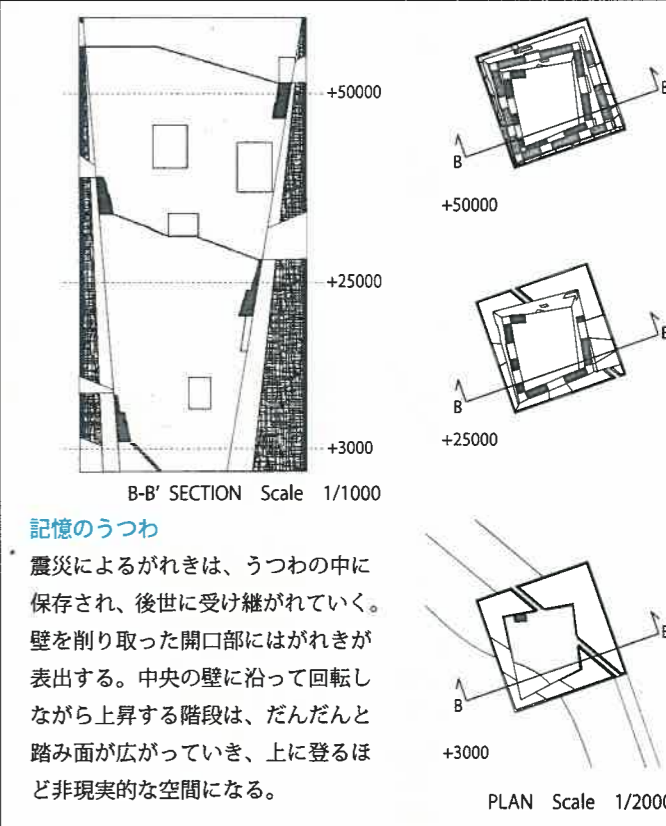
岬にそびえたつ記憶のうつわ。  
石巻市の名産である稲井石をまとった黒いうつわは震災の記憶を内包したまちのシンボルとしてこの先の石巻市を見守っていく。



階段の踊り場に付随するうつわの開口。その断面からはがれきがのぞく。  
開口越しに海とまちの景色が現れる。

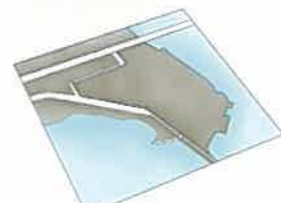


うつわの下部は海に向かってめくれあがっている。  
そこから波のただよう様子が見える。

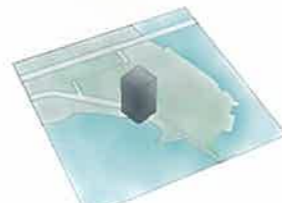


**記憶のうつわ**  
震災によるがれきは、うつわの中に保存され、後世に受け継がれていく。壁を削り取った開口部にはがれきが表示される。中央の壁に沿って回転しながら上昇する階段は、だんだんと踏み面が広がっていき、上に登るほど非現実的な空間になる。

diagram



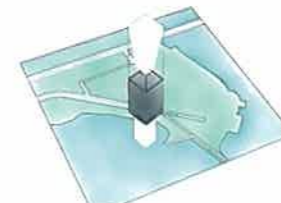
01. 陸の先端にある岬



02. 大きなうつわを置く



03. がれきを入れる



04. うつわを揺き取る



05. 上昇する階段の挿入



06. 壁に開口を開ける